



受難の主日(枝の主日)(マルコ 15:1-39)

言葉を尽くしてイエスの沈黙を説明するなら

受難の主日、イエスのご死去までの出来事を駆け足で辿ります。聖木曜日、聖金曜日の典礼に参加できない方は、特に今日の典礼を通して、私たちのために血の一滴まで流し尽くされたイエスの犠牲・奉献を思いましょう。そこから、この一週間私にできることは何か、考えてから生活に戻ることにはしましょう。

田平小教区の皆さんは、先週の連絡会で、復活の主日・日中までの説教を配布してもらえるようお願いしました。すでに目を通されている方もいるかも知れません。本日の朗読で、イエスが語られたのは最初と最後だけです。しかも、一切弁明をしないのです。

私たちの主は、なぜこうまで沈黙を守られたのか。イエスの沈黙の中に、復活への希望を見いだす。イエスの沈黙の中に、私たちも場所を見つけ出す。そんな十字架の道行が、私たちにも必要になってきます。

時折、物言わぬ沈黙が尊い価値を持つことがあります。東日本大震災から10年を迎えた3月11日に、特集番組のいくつかを見ました。その中に、すでに退職した似顔絵捜査官のドキュメンタリーがありました。この人の手にかかれば、それまで手がかりがなく暗礁に乗り上げていた事件が一気に解決する、そんな似顔絵を描く人物でした。

この元捜査官が震災の身元不明者を遺族にお返しする切り札として呼ばれたのです。痛みの激しい遺体や、完全に白骨化した頭から、本人の特徴を引き出して似顔絵を描きます。似顔絵が決め手になってたくさんの身元不明者を遺族に引き渡すことができました。今も、最後の一人まで遺族に引き渡そうと、一度描いた似顔絵も描き直して捜査に協力しています。そんな番組でした。

ご遺体は、何も語りませんが、元似顔絵捜査官だった人は、そのご遺体の声なき声を拾って、似顔絵に反映させていました。何も語らないはずの骨から、当時の姿を引き出す。そこに実際には声はなくても、正確に伝わる何かがあるのだと実感しました。「沈黙に聴く」ということでしょう。

イエスの十字架上の場面は、言葉で言い尽くせない神の計画の集大成です。それを言葉であれこれ説明する必要があったなら、イエスはいくらかでも説明を尽くしたでしょう。しかしイエスが選ばれたのは沈黙でした。人間的に考えれば、何も語らなければ誤解され、思いをねじ曲げられる恐れもあるのに、イエスは何も語らず、ご自身を十字架上でさげました。

それは御父への信頼があったからです。「御父は、沈黙のうちに十字架上の救いのわざを正しく理解させてくださる。心配する必要は無い。」御父への絶対の信頼があったから、イエスは沈黙のうちにすべてを成し遂げたのです。

沈黙が私たちに教えていることは何でしょうか。それは私たちがイ

エスのように御父への信頼のうちに生きることです。私たちも、御父への信頼のうちに生きるなら、たくさんの言葉よりも沈黙のほうが価値を持ってきます。言葉で弁明したくなるところを、沈黙の中に留まることができます。御父が、私の沈黙の正しさを証明してくれるからです。

イエスは十字架の上から言葉で弁明しませんでした。御父が沈黙の正しさを証明してくれると信じました。そしてイエスは復活し、ご自身の正しさを証明してくださったのです。

イエスは私たちにも招いています。沈黙の中に、場所を見いだすこと。沈黙の中に、答えを見いだすこと。人間のどのような弁明よりも、神がそばにいて守ってくださる沈黙のほうが、はるかに力強く、信頼できるものです。イエスはそのことを十字架の上で証明されました。私たちは同じことを、それぞれの人生の上で証明するのです。

聖木曜日(ヨハネ 13:1-5)